

けやきの歴史



「けやきを語る」

開館前後に代表をされた佐藤季男さん、事務局長をされた青島さんに当時のけやきコミセンへの思いを伺いました。お話を要約させていただいたものです。

出席 佐藤季男（元代表）・青島慶子（元事務局長）

島森和子（現代表） 記念誌チーム・高田昭彦・中澤幸子

* 出会いから開館まで **** *

佐藤：20周年、ずいぶんたったものだね。

私は武蔵野市の少年野球連盟の会長をやりながら、東京都の教育委員会学童スポーツ部の実行委員もしていた関係上スポーツ場がほしくて都庁の大会議室へ公園をつくる公聴会に出かけた。それがけやきコミセンの方々と顔を合わせるキッカケでした。けやきコミセンを建てようという話を聞いたとき、武蔵野市のコミュニティ構想の本質もよくわからない状態でした。コミセンとは町内会の事務所かということをして市に質問した。講習会や懇親会とか市民の集まる場所ですよ。武蔵野市は地方と違って誰かの家に集まって会議をやる場所がないのだからそういうものと思ってもらってよいと言われた。そのころコミュニティセンターは分室も入れて13以上あり小学校の数よりも必要なのかと疑問も持った。



コミュニティセンターがいかなるものかと言うことを知ってもらいたいと言われて、市の研修に出かけていたら高田先生が講師だった。コミュニティという言葉そのものがどういうものかもわからず、困ってしまった。そうしているうちに、安藤さん、青島さんたちが住民として中央北コミュニティセンター建設の署名をお願いしたいとやって来た。わからないのでその場でお断りした。しばらくしたらタイガース監督をしていた谷口（光）さんが見えた。谷口さんが、名前だけでもいいから協議委員会賛成のはんこだけくれないかと言われた。でもこういう性格だからなにもわからないではんこだけは押せなかった。2回目に安藤さん青島さんたちが自宅の玄関にきて、子どもたちもお年よりも遊べる場であるコミュニティセンターというものの意味を高田先生から聞いたでしょう、とにかくコミュニティセンター設立をお手伝いくださいと粘られ、では何かの時のお手伝いはしましょうと返事をした。それがすべての始まり。実際にはそのころは放送局の取材の仕事をしており土日が忙しかった。水曜日は報道の記者クラブが休みの日だったので水曜日なら時間がとれると言ったら、即決され、会議は水曜日になった。（現在の休館日につながる）まだ事務所は無かったがなかよし公園の集会室などにでかけた。ある年は、元日のゴルフ場の喫茶店に6～7人全員が集まったりもした。そこまでしている人たちの熱意。けんかのような議論もあったし忙しかった。

島森：そのころ青島さん安藤さんのやり取りがおもしろかった。青島さんが多様なことを発信して時にどうなるのか理解できないこともあったが、あとから安藤さんが理路整然としてまとめ役としてやり取りをしながら進んでバランスが保たれていたように感じる。

青島：佐藤さんは地域の信用があり、いろいろなことを考えていらした。私は少年野球の監督として知り、子どもが本当に大好きでこんなに愛情がある人はめったにないとひらめきでお願いしようと思った。管理的な建物じゃなくて違ったもの、ハードよりソフト面を考えて建てたいと思ったときあの子どもの好きな佐藤さんしかいないと思った。

佐藤：そのころ朝歩いて、市内の学校を回っていた。なぜ歩いたのか。歩くと子どもが

私の顔をみて挨拶の声をかける。バスに乗るとかえって大きな声で声をかけられるから恥ずかしい。歩くと声をかけてくれる人が結構いてこれが楽しい。

青島：佐藤さんは子どもが好き、人が好きである。これがまさにコミュニティなのです。

コミュニティとはなんぞやなんて聞かれたって即答できるものではない。自分たちで作っていくもの。今もきっと変わっていない。その地域らしく、集まった人たちで絶えず進化していくものです。

お受けになった佐藤さんにしたら悩みもあったと思う。けやきの一番最初をまとめていく大変な時期をずっと担っていただき、議員さんや市長たちと住民の間に立ち大変だったことだと思う。それに耐えられた。それはみんなの意見や気持ちを尊重してくださったからだと思う。そのようなことに耐えられる人は少ないと思う。

佐藤さんは全部の人の意見に耳を傾けるのが代表だと思っている。みんなから意見をもらったらそれをやらなきゃと思う人。そこが一貫している。個人的にはやりたくなかったこともあったかもしれない。しかしみんなの総意だったらやろうという人です。

佐藤：わたしは代表といってもコミセンの一番暇なやつが出てきているだけで、大八車に乗って後ろから押してもらっているのだと言っていた。

中澤：話し合っているとみんなの総意はなかなかまとまらないのではないかと。

青島：そのときはけやきを建てたいというのが総意。話し合うといろいろな意見があるけれどそれにプラスになるにはどうしたらよいかをみんなの意見を聞きながら判断していく。だからいい意味で自分の意見もないと前には進まない。こうありたいけどどうか？とみんなに投げかけていくことが基本形です。

佐藤：当時ある議員さんにあの地域にコミセンは無理だと言われたことがある。緑町・北町にコミセンがあるし、議員さんがいないからと。

青島：けやきはだれか有力者の力で建てたのではなく、市民が時間をかけみんなの力が結集してコミュニティが出来てきてつくった建物。だから今みんなが愛していて、みんなが自分のものだという意識で参加して力になっている。誰かのものだったらすぐピラミッド型管理運営になり代わり合うことができなくなってしまう。

佐藤：いかにけやきコミセンが必要かという公聴会を市で行った。50人くらい集まった。わたしは人と話をするときはマイクを使用しない。肉声だとみな何をいうのだろうかとかと口元を見て聞いてくれる。そのときは駄目と言われたら市長と喧嘩するくらいの気持ちで話をした。

青島：けやきコミセンを立ち上げた頃のメンバーから今までにどんどん代わってきた。まさにいろいろな人が関わってきた。けやきがここに来るまで大勢の人が支えてきた。佐藤さんのよくおっしゃることに「皆さんのおかげで」ということがある。心からそう思っているから、みんながついてきてくれたと思う。私もいろいろと意見を言うけれどみんなの力がすごいなということをいつも心から思っている。大勢の力が無ければここは建たなかった。けれどその分けやきの核を引き受けた人はみんなの何十倍も汗を流していた。自分は30代初めで若くて生意気だった。それでも理解してもらえたのは一生懸命若いのがやっているというところをみんなが見てくれたから。たくさんの人をつなげていくということは大変難しい。

島森：わたしも20年前に青島さんの人が好きという言葉に魅かれた。

青島：会議のあとも時々、佐藤さんとうなったらいいな、あんなったらいいねと語り合えた。夢を追い求めている集団だった。普段はみな普通の人なのに、夢をつくることで共鳴しあった。出来るはずがないじゃないという思いから、やれるかもしれない、やってみようとなった。ゼロからスタートしたのだから失うものはなにもない。みんなそういう気持ちを持っているが、出会いがないとでてこない。

佐藤さんはよくみんなに大きな声で声をかけていた。入口でこんにちとは声をかけられると気持ちが明るくなる。返事をいわない子もするようになったりした。相手が誰だからとか関係なく来館者に声をかけようとみんなで言っていた。

青島：開館して1年半くらいでハンドブックを作った。それは立ち上げたときのけやきの心は月日と共に色あせてくる。自分もどこかでけやきを去るときに、一番大事なその心のところをどうやって伝えていけばよいのか。地域の中で愛されるために人を大切にすることとどういう形で残したらよいのかといったこと。心は形が無く、人をつないでいるのは心だけ。建物が出来てからのほうが難しいことでしょう。建物を守るようになってしまうから。人間の本質にふれる部分をハンドブックにのこした。コミュニティは人をつないでいく。みんなにとって何が大事か。目指すものは1つでない。地域の問題はいくらでもある。エリアを持たない考え方もそこから来ている。いろんな人が影響しあう。管理という発想をどれだけしないかの挑戦。もっと挑戦していろいろなことができるはず。

*建物へのこだわり****

佐藤：市の設計では学校のような建物だった。ガラス窓のこととか中庭のことなど反対された。でも明るいということは使う地域の方の心が明るくなると説明した。

青島：同じお金をかけるのであれば、使う私たちのイメージを大事に考えたかった。市から提案された建物に、みんなが納得できず、みんながノーといえたことはすごいこと。エネルギーと意思をもちみんなが建設に参加していた。

島森：みんながノーといえる雰囲気、意見を言える場があったということですね。

青島：みんなが分担して研究した。結局没になったこともたくさんあったが、それぞれチームを組んで研究したことで大変な力になったことを実感した。だから人はお互いに刺激し合って変えられる。壁の椅子の高さや受付のカウンターの高さを利用者の人の目線から考えてイメージして考えた。そのたびごとに勉強をしたことが大変だったけれど面白かった。

島森：トイレの色から一つ一つ話し合いをしていてびっくりした。

青島：建物に関して言うとたくさん見に行った。あっちこっちいいものを見て、年齢に関係なくどうだったとか話し合っ、その中でだんだんこういうものがあるというのが一致してくるのが不思議。それには実際の目で見ることが大事。現場思考でない。みんなのおかげで出来上がった。みんな喜び合った。

佐藤：彫像のこともあったね。建てる段になって、市がこれは市に寄贈されたのではなくけやきコミセンに寄贈されたのだから市の土地に建てては駄目とやってきた。それではと 彫像部分の土地1㎡を有料で借地することになった。建てたいあまりに生まれた発想だった。

青島：みんなにとってすばらしいものだ、そのためにどうすればよいのか。大事なのは

そこ。みんなが何をめざしたらよいのか。そうでないとひとりよがりになる。みんなが多様化している中絶えずこれでいいのかと問いかけ考えることが大事。

話し合いからコミュニティへ***

佐藤：役員の方々のけやきへの情熱を見ているとお家はどうなっているのかと思うほどだった。みんなでとにかく話し合った。

島森：何時におわるかわからないほどの情熱でみんなものめりこんでいた。

高田：家族からまたけやき？とよく言われた。

中澤：限りある時間の中でみんなと話し合うと、特に建設という中で大きな決断を次々にしていかなければならないときに、どこかで決めていかなければ進めなくなるのではないか。

青島：よく話し合ってきたということよね。その中で決断するにはみんなの目を見て共有していくのが大事ということ。

島森：今、話し合いはよくしているが時間がなくて実際にみんな外へ見に行くということが少なくなっているかもしれない。運営委員の人数が増えたということもある。

青島：所帯が多くても少なくてもみんなをまとめていくということは大変なこと。集団としてみんなが高めあいやっていくのには、新しいものを取り入れていかなければだめだと思う。やり慣れたことばかりだとなんとなく安定するけれど淀んでくる。私がやっている頃淀みそうになると新しいことを仕掛けた。そしてその仕掛けは人の出入りの中で変化していく。みんなの意見を聞いてどれだけ柔軟にすすめるのか、いいものに変化していくのかでみんなの参加の幅も広まる。ここまで決まっているというところから入るといったい何のためにやるのかわからなくなる。核のひとは大変だけれど柔軟にやる気持ちの余裕と包容力を持つことが、けやきが自由に羽ばたく要素なのではないか。

佐藤：意見が出たとき、それは無理よと押さえちゃいけない。まず聞くこと。人との話し合いのなかでなにが生まれるかわからないのだから。

青島：けやきそのものがそうして生まれたのだから。なにが生まれるかわからないのが



いい。ここでしゃべって明日は違うものが生まれるということは日常茶飯事。いま決めたでしょうではなくて違った方向に向くとそれもいいねと乗って考える。お当番に入ったときなど、どう思う？とかこうしたいよねとか常にしゃべっていた。会議じゃないことがしゃべれるから一つの機会だと思っていた。個々で話すことも大事ですね。

新しい時代へ羽ばたくために***

中澤：初期は建設や管理運営をどうするのかと一丸となって動いていた。外に向けて働きかけしていこうとか。現在は活動が活発に育って細分化され、枝葉が伸びている。けやき全体が見えなくなっている部分もある。

青島：なんのためにやっているのかを考えることが大事。今の時代に欠落しているのは人への優しさのような気がする。独自性を尊重するための気遣いが違っている。みんなが人に優しく、一つの家族として考えることが出来るよう、声を掛け合うとか実際の協力ができなくても心を寄せている人がいるということをお忘れなさい。ここは公なところだから、ただ自分が好きな事を好きなようにやりたいということなら、コミュニティじゃない。自分の家でやったらよいこと。みんなにとってなにがよいのだろう。それを自分も楽しむこと。まず自分が楽しむことを優先するのはぜんぜん違う。

佐藤：こういう話を昔はしょっちゅうやっていたね。こっちも負けたくなくてしゃべっていた。思っていることをしゃべりあうことは最高にいいこと。

青島：そうしないと長く続かない。絶えずいいものを目指していきたい。どうありたいかということはすぐ出ないが、今何処が問題なのか、しっかり把握すること。

島森：先を見ながら新しいことを考えていくという意味でも、一時休んでいた学舎の集まりが最近動き出したかなというところは意味があると思います。

青島：むずかしく話し合うだけではなく、もっと具体的な、声かけキャンペーンしようとか友達一人増やそうとか 原点を押さえながら将来的につなげることをやってみるのはどうか。地方自治体はお金をかけない村おこしのことをあちこちでやっている。私だったらあちこちでかけていって、新しいエッセンスをもらいに行く。活動を外に広げるために。発想の枠を広げていくこと。

島森：まちづくり局も個々に力をもっているが 行き詰っているところもでてきた。

青島：やはりまちづくり局を何年も長くしている人もでてきている。たえず新しい人に代わっていくこと、人が替われば新しい人との出会いがうまれる可能性がある。新しい芽を摘まないことが長くやっている人の使命です。

佐藤：代表も3期以上やらないと決めてきた。えらい人を作らないため。

青島：代わりあっていくことは違った経験をする事が出来る道が開けることです。コミュニティが広がること、それは大事なこと。

中澤：けやきも新しい人が少なくなってきた。大事なこととおもっても、スタッフがなくて続けられないこともあった。

青島：もっと人の出入りを敏感によく見てほしい。お弁当を食べにきたり、広告ちらしを見ている人がいたり・・・そういう人に声をかける。その人がけやきを選ばないかもしれない。でもじっとその人にその時間寄り添ってみる。そして新しい人たちに対して経験者は出来る限りの穴は埋めていた。やれることとやれないことなどじっくりと考え直すのも必要だとおもう。もっと異色の人との出会いを求めていくといいとおもう。いままでけやきもどれだけの人と出会ったかわからない。動けば出会いはある。いままでやっていないやり方もやってみるとおもしろい。楽しみながら面白がりながらオーラのある人を見つけていったらよい。補助金に頼らず半分でもいいから自前で地域おこしのようなことをやってみるとか。そんなやり方もある。いろいろなことを自由にやってみること。みんなとちょこちょこ話し合っ、見に行っ、新しいことにチャレンジしていくのがいいですね。

(2009. 9・5)



けやきの歴史

1969 国民生活審議会コミュニティ問題小委員会報告書

「コミュニティ生活の場における人間性の回復」

71. 2 武蔵野市コミュニティ構想策定

76. 7 市内コミュニティセンター第1館(境南コミセン、大型館)

82. 5 中央北コミュニティセンター建設準備会として発足(当初、緑町+北町西側を想定)

★クリーンセンター用地選定運動の経験から ★新旧を超えた人のつながり

※毎月のコミュニティのつどい

83. 1 第8回コミュニティのつどい=カレーパーティ(なかよし公園)

=第1回けやきまつり(活動費捻出のため)

84. 2. 第1回住民総会「コミュニティアピール採択」

84. 10 中央北地域コミセンの建設用地が緑町に決定の説明

(「分散方式で北町にも!」陳情・請願・広報・・・)

84. 11 けやきコミュニティ協議会に発展的移行(ユニークなコミセンを!)

※2回目の第1回住民総会

89. 1. どんと焼きのつどい始まる。(「お飾りをゴミに出したくない」との町の声から実施)

89. 12. 16. けやきコミュニティセンター開館(市内17館中16番目の建設)

★会則・使用のきまりなどに活動の経験を反映。

★「けやき」らしさにこだわる。(建物、備品、管理、運営、イベント、しくみ、人間関係・・・)

(きまりを少なく、張り紙をしなない、自販機を置かず麦茶を・・・)

※2~3年は館の管理・運営に手一杯

92. 5. けやきコミュニティハンドブック 初版発行

(運営委員会で4人の編集委員が選出された)

93. <おもしろ発見会議>-まちに出よう、人をつなごう!

(市特別事業始まる。50万円×5館)けやきは通年事業として企画、実施。

94. “けやき並木につづく道”発行、5周年、(開館まで、開館初期の記録、学舎担当)

★まちに出よう!

95. <まち発見>(通年事業) タウンウォッチング ★まちを知ろう!

96. <いいまち創ろう>(通年事業) 福祉の視点を大切に、いいまち創る私たち

97. <いいまち創ろう Part II>(通年事業) 花でつなぐコミュニティ

市予算に活動費創設

98. まちづくり局発足

(数年にわたる「まちを知る」「まちの人と組んだ」活動後、いいまちセンターから発展)

★同時多発の活動、予算の保障、外に広げ新しいチーム新しい参加を促す

99. 10周年 <いいまち創ろう'99> 記念誌“まちを創る”発行。

2000 <出会いの広場>(利用者との協働)

01. ベテランが抜けて、運営委員総数も減。 ★けやきの曲がり角

けやきの内側に目が向いた時期を経て、再び地域や他団体とのお付き合いなどにも目が向いていく。

02 学舎再開

03. *ワークショップ「コミュニケーションを深めよう」

(会話、議論を深める工夫。多くの人が発言できる工夫。体験しながらの学び。)

*まちづくり局一年間通じての多彩な活動の充実。チーム間の共同。

—各チームが人をつなぐ工夫。 —子育て世代、子どもたちの参加が増えた。

※子ども、若者たちへのアプローチ。参加の質を高める工夫。

★一緒に「曲がり角」(困難)を超える努力

*「地域での子育て懇談会」呼びかけ主催。(小中学校・PTA・幼保育園・青少協など..)

* けやきしゃべり場発足 「自由にまじめにしゃべりあう」

朝岡幸彦先生(東京農工大・環境社会学)お話

※他団体との人的交流、つながり

(学校、保育園、青少協、福祉の会、園芸ボランティア、PTA、など)

※新しい展開(文化会館での音楽会、ハロウィン、市役所への展示、

「まちの人と、町を知る」ウォークラリー..)

※けやきにおける日常活動の体験に基づく意見を反映(あり方懇、評価委員会)

★量も、幅も増した活動

04. 「地域の課題を探り、共有し、その解決への働きかけへ」(評価委員会より指摘される)

※研修会の重視、(ソフトハード両面で)

* まちづくり局に新顔誕生(けやき茶社、エコマネー研究=エト研発足)

※利用者へのアプローチ(利用者呼びかけて”花展“開催、利用者へのアンケート)

★活動の質を高める意識 ※他団体、新しい対象へのアプローチ

(まつりへの参加呼びかけ—福祉の会、町内会、他コミセンとの囲碁交流試合、

6年生卒業を祝う会、成蹊大・加藤節先生講演“大学のある町”など)

★地域の課題を意識

05. 扶桑通りの緑化について「成蹊大学ウォッチング、周辺ウォッチング」指定管理者制度

*「エト市場」開催 * ナイトウォーク(防犯の意識) * ジョイフルコンサート(川上村)

06. けやきの明日を考える会発足

*「子どもの参画をすすめる会」発足、

*「まちづくり三者懇談会」開催

(成蹊学園・市緑化センター・けやきコミュニティ協議会 担当・学舎)

* けやき「コミュニティのつどい」復活

★「曲がり角」をまがった意識

07. 第1回子どもがつくるまちむさしのミニタウン開催(支援対象に)

扶桑通りの交通実態調査実施(ビデオ撮影)

* 20周年記念行事実行委員会発足。

08. 地域の事務局・コーディネーター役を目指して

—「地域の防災を考える会」「支援事業を考える」など。

男性の参加増(00年=36名中8名、22% → 08年=65人中24人、36%)

★新しい波の予感 ★小さな曲がり角がいくつもあることを発見

09. けやき 20 周年記念

テーマ「新しい時代を拓くコミュニティ」

* 記念事業 *

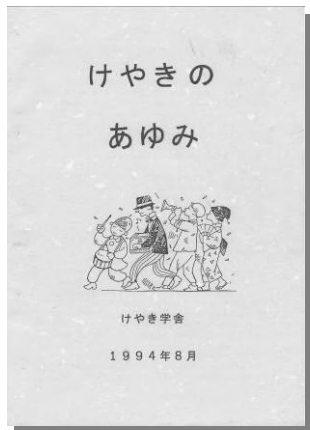
- ・大野田地域防災の会設立へ（バス研修 藤沢市）
- ・開館20周年記念コンサート「おしゃべり音楽館～気軽にクラシック」
- ・みどりのまなびや 学舎・しゃべり場共同企画
 - 第1回 けやき DE しゃべろう！学生たちはけやきで何を見つけたのか
 - 第2回 吉田善明さん「1970年代 武蔵野市のまちづくりの思い出」
 - 第3回 野津 功さん「まちの木々を訪ねあるいて」
 - 第4回 宇賀神 勲さん「80年前のこのまちをしていますか」
- ・けやきニュース20周年記念特集(2008年度)・けやきコミセン物語(2009年度)
- ・記念誌の発行「新しい時代を拓くコミュニティ」 記念誌チーム
- ・記念品 卓上カレンダー作成 ぱそこん倶楽部
- ・ジオラマ作成 けやき改築プロジェクト
- ・まちづくり局各チームの取り組み
- ・式典祝賀会 ・祝う会

	代表	事務局長	運営委員数（監査2人含）
1982～1988年（開館前）	佐藤季男	青島慶子	（29～32）
1989年（開館）	谷口光	安藤頌子	（33）
1990年	谷口光	安藤頌子	（40）
1991年	谷口光	東條直子	（40）
1992年	佐藤季男	東條直子	（40）
1993年	佐藤季男	吉松杉子	（38）
1994年（5周年）	佐藤季男	吉松杉子	（42）
1995年	吉松杉子	野津睦子	（36）
1996年	寺島芙美子	東條直子	（43）
1997年	寺島芙美子	東條直子	（45）
1998年	吉松杉子	野津睦子	（46）
1999年（10周年）	吉松杉子	森谷君子	（51）
2000年	吉松杉子	森谷君子	（34）
2001年	寺島芙美子	森谷君子	（48）
2002年	寺島芙美子	前田美代子	（50）
2003年	寺島芙美子	前田美代子	（53）
2004年（15周年）	高石 優	富 秀子	（53）
2005年	寺島芙美子	富 秀子	（55）
2006年	寺島芙美子	富 秀子	（64）
2007年	寺島芙美子	前田美代子	（63）
2008年	島森和子	中澤幸子	（65）
2009年（20周年）	島森和子	中澤幸子	（60）

活動記録の冊子



1994年9月発行
まちづくり総合計画。まちづくり特別補助金を申請、1年かけて「まちにでよう！人をつなごう」をテーマに様々な企画を行ったまとめ。



1994年8月発行
けやきの歴史や心のあり方を持続し発展させるため生まれた学舎の講演会・まちウォッチング・アンケート調査のまとめ



1994年12月発行
けやき5周年を記念して開館までと、けやき初期の歩みのまとめ



1996年4月発行
私たちの住むまちをよく知り住みよいまちにしたいと「まち発見！」わがまち探検のまとめ



1997年7月発行
まちづくり総合計画を一步進めて「いいまち創ろう」活動がスタート。いいまちセンターを中心にこの指とまれ方式のチームが誕生



1999年10月発行
けやきの10周年記念誌インタビューの生の声を尊重し編集。役割分担と活動日誌の10年を掲載



2000年4月発行
10周年を記念して「出会いの広場」利用者とけやきが共に交流し発信する企画のまとめ。36グループ43企画、1280人の参加



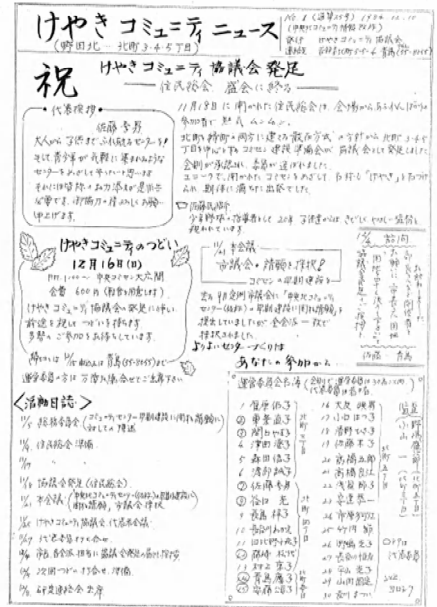
2002年3月発行
まちづくり局活動5周年まとめ

けやきコミュニティニュースの役割

けやきコミュニティ協議会で発行している広報誌「けやきニュース」は、けやきコミュニティセンターが開館する以前から旧野田北・3丁目・4丁目・5丁目地区に配布され、けやきコミュニティセンターが完成するまでの様々な情報を地域の方々に伝える唯一の広報誌というとても珍しい役目を果たしていました。

はじめ1982年6月14日付の「中央北・大野田学区コミュニティセンター情報」というタイトル、B5版縦書きで1300部発行しています。この頃は緑町にも配られていました。けやきコミュニティセンターの開館より7年も前から発行していたのは、この地域にコミュニティセンターを建てたいという人々の強い想いと、沢山の人たちに知って欲しいという想いがあったからこそ、回覧板がわりの地域を繋ぐ情報紙として発行し続けていたのだと思います。

1984年11月18日にけやきコミュニティ協議会が発足して12月10日付で発行したニュースは、名称を「けやきコミュニティニュース」に改め第1号としてスタートし、そのためナンバーと通算ナンバーがついています。



けやきコミュニティニュース第1号



けやきコミュニティセンターが開館して最初に発行したけやきコミュニティニュース！

「中央北・大野田学区コミュニティセンター情報」は第1号～第24号まで準備会の発足と建設用地の決定までの過程を地域の皆さんに分かりやすく説明してお知らせしています。

第25号からは「けやきコミュニティ協議会」発足を機に「けやきコミュニティニュース」と改称して、気持ちも新たに第1号のニュースとしてセンターの設計から開館までの状況を見守りしっかり伝えていくという形を第28号まで書き続けています。第29号では大勢の地域の人々が待ちに待ったセンターの開館という最大のニュースを伝える事が出来たのです。

それからは「けやきコミュニティセンター」の利用の仕方からイベントのお知らせやまちづくり局の紹介&募集など様々な情報をお知らせする事ができる、地域の大事な広報誌として続いており現在は約3500部発行しています。



1991年～1998年頃のニュースの表紙は地域の方の素敵なイラストや子どもが書いた「けやき」の題字を載せたり、コンピューターグラフィックで書いた地域の風景を載せたりと沢山の方が関わってくれている手作り感いっぱいの内容です。



第35号 1991年11月18日発行

第34号 1991年9月1日発行

いま、2009年11月第96号（通算120号）のけやきニュースを発行すべくニュース担当のメンバーは情報や原稿を集め、慣れないパソコンの操作に四苦八苦しながら編集作業を続けています。

情報が多種多様な現代社会は、とても便利な世の中になっているような錯覚を起こしてしましますが、ニュースの紙面は手にとりぬくもりのある生の情報として、いつの時代にも親しみをお届けできると思います。けやきコミセンを知らない人にも、読むことでこちらの側の思いが届き、けやきに出かけるキッカケを見つけて欲しいと願います。

試行錯誤しながらですがしっかり作っていかなくてはと改めて思いました。



イベントのチラシやぬりえも一緒に配布されました。



第22回 住民総会が4月15日(土)に開催されました。

2005年度の活動報告・会計報告・監査報告、続いて2006年度

活動方針・予算案について説明があり、承認されました。

また運営委員・監査委員が決まりました。(3面)

2006年度 活動方針

「けやき」のみどり豊かなまちを新しいふるさととして愛しみんなで仲良くまちづくりをすすめます。〈けやき密着〉

赤ちゃんからお年寄りまで、誰もが立ち寄りたくなるまちづくりの拠点としてのセンターを目指し活動します。

けやきのよさを継承しながら、夢のある充実したまちづくりを目指し諸活動をすすめます。



ご挨拶

代表 寺島美英子

けやきコミュニティセンターも開館して17年、地域のより所として多くの人に親しまれ、利用されてきました。常に実働者の立場に立った運営を心がけ、私達の住む町をいまにしようとの思いから、「まちづくり」や「人と人をつなげる」ことをテーマに活動を行ってまいりました。運営委員も増え、イベントも益々広がりがグローバルなけやきになってまいりました。年間を通して見学者も増えていますが、外にも広がりがあつたイベントをどのように方向付けしたらいいのか、また窓口の対応をよりよくするためにはどうしたらよいかなど、考えうる時期を迎えています。皆様のお力をお借りし、今後のけやきについて話し合う機会を作りたく思いまいますので宜しくお願いいたします。

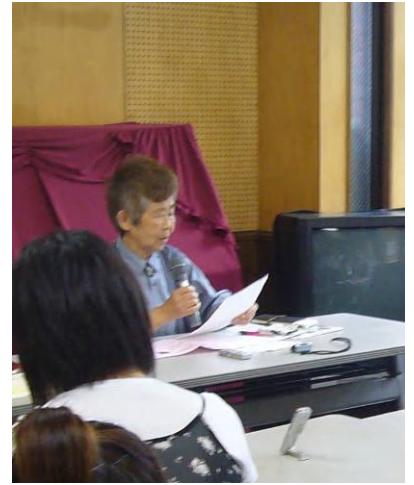
今年度のニュース82号（通算106号）

2006年5月10日発行

子どもたちの「心のふるさと」

安藤 頌子

けやきコミュニティセンターが開館するまでには7年間もかかりました。紆余曲折ありましたが永年の想いが実り、建設が決まって、正式に運営委員を募集し、開館を迎えたのが20年前の12月。12月から開館の年の4月からから二年間私は事務局長をしました。何にもないところから仕組みづくり、会則や、使用のきまり、お当番の仕事内容など、何から何までを同時進行で、開館記念行事の企画委員会を初代の代表だった谷口光さんの担当で一緒にやりました。



先日も見学の方たちから「作って20年も経っているのに、どうしてけやきは元気なのか、その源はなんなのか？」という質問があったそうです。それを聞いて、私も事務局長時代の、もう殆ど20年ぐらい前のことを思い出しました。できたてのほやほやの時に、見学者が5、6人お見えになりピカピカの館を張り切ってご案内したのですが、その中のお一人がお帰りになる時に「10年後もこういう話を聞けるといいですね」と言われたのです。あれから20年、今も元気というよりますます充実するけやきを見て、これからの10年もこのような新鮮な気持ちでみんながけやきでイキイキ動いていたらいいなと思ったことでした。

1969年に自治省の国民生活審議会、コミュニティ問題小委員会の報告書がでました。「コミュニティ、生活の場における人間性の回復」という小委員会の報告です。これがそもそもの始まりであったと聞いております。ここに、成蹊大学の佐藤竺(アツシ)先生が、委員として入っていらしたというご縁もあって、武蔵野市は、他市に先駆けて、コミュニティ構想を策定しました。その時策定したのが、コミュニティ構想策定市民委員会で、市民委員は市民である学者さんが中心でした。学者さんたちが喧々諤々(けんけんがくがく)、後にあれは僕達の夢を語ったものだったと、おっしゃっていましたが、私たちはその夢を本気にして真剣になって取り組んで実現したわけです。松下圭一先生とか、篠原一先生、佐藤竺先生、吉田善明先生、様々な学者の夢を学びながら、今日まできたわけです。

ことのはじめは、1982年中央北コミュニティセンター建設準備会の発足でした。〔冊子・けやき並木に続く道参照〕ふつうコミュニティセンターをつくる時は、市が用地を取得して「これはコミュニティ用地です。皆さん集まって、どういう建物にするか相談してください」と地域団体や個人に呼びかけて、事が始まるわけです。その時集まった人たちが、たくさんのことを短い時間で決めなければなりません。ところが、ここの地域は違いました。「クリーンセンター建設用地を市民参加で決めなおさせた」運動の経験、「市民参加」についての勉強や、地域の中での新旧を超えた人のつながりができていました。そしてこの運動の体験の中から「この地域にも自由に使えるコミセンがほしい」という声が自然に出てきたのです。

地域の中でアンケートを取ると「今までのようなものだったら要らない」との答えがいくつか出てきました。このことをみんなで話し合い、「ユニークなコミセン」を作ろうと決めました。自分がコミセンを利用して不便だったり、不快だったりするようなことは取り入れない、いいと思ったことは先例がなくてもやりたい。会則やいろいろなきまりも、全部自分たちで活動してきた実感に基づいたことをもとにしました。

社宅の多い土地柄で、大勢の人が入れ替わりながら、毎月10数人の相談の会が開かれ、それが「コミュニティのつどい」に。市内外のコミュニティセンターは勿論、図書館や美術館も見学に行ったし、人を呼んでお話も聞いた。しゃべって、しゃべって絵にかいたり、見たり聞いたり読んだり、よく話し合ってみんなが納得できる方法を探りました。周りの人も「あんなに熱心にやっているんだから」と言いながら、建つか建たぬか分からないものをよく見守り育ててくれたものだと思います。ニュースでのお知らせも、はじめの頃の全戸配布は1500枚くらいが、だんだん配り手も増えて配布枚数も増えました。まちの様子がわかるようになってきました。

目出たく建ったコミセンの名前は勿論「けやきコミュニティセンター」運動を始めて7年、始めたころは数館だったコミセンは、16館目になっていました。下見オーケーとの連絡がきて入った建物の美しさ、ピカピカしていて、土足がはばかれるようでした。「スリッパにしようか・・・」と迷いましたが、またまた大論争(?)の末やはり土足にきました。利用者の気持・心地よさなどが、いつも判断の基準になりました。

2~3年は、管理運営だけで、手一杯。段々に慣れてきて、未知の人達が知り合っけてコミュニティをつくるためにまちに出ようと。コミセンをコミュニティ作りの拠点にしようというのが、武蔵野市のコミュニティ構想ですから、こんどはまちづくりだ!ということ。93年始まった市の特別事業で予算が50万円つきました。それまでは管理運営費のみで活動費に予算はつかなかったのです。予算は一発行事に終らせず本当にコミュニティに繋がるような行事をしていくには、どうすればいいかということ話し合い、通年行事として「おもしろ発見会議—まちに出よう、人をつなごう—」を計画しました。市役所のコミュニティ文化課(当時)は、通年行事の意義がなかなかわからなかった。おもしろ発見会議を口開けとして、ともかく大勢の人と「まちを知ろう」ということで、いろいろな事をしました。福祉の施設巡りをするグループは、今で言うからだほぐしとお食事の会につながり、千川上水プロジェクトが今の風と歩こうという会になり、いままたナイトウォークなどに発展しているわけです。子どものことも忍者や夜店・・・などいろいろやりました。それらが今のまちづくり局につながっています。96年には、「いいまちつくろう」—福祉の視点を大切に—という副題でした。みんなの幸せ(福祉)という視点でいいまちイベントを組んだなんて、大勢のしゃべりあいの知恵というのは大したものですね。

設計の早川さんをはじめ私達はお世話になった方が沢山います。月日が経ちけやきは運営委員も替わり、新しい方が窓口に座ると、本当にお世話になった方がいらしてもわからない。その時にどうやってカバーするのか。いらした方全員に親切に心をこめて対応することでしか、クリアできないのではないかと話し合いました。そこが今のけやきの受付の原点になっています。

しかし通年行事を何年か行おうとしょっちゅう忙しい。10年目の区切りにベテランが結構抜け、運営委員の総数も減りました。心を合わせて乗り切るためワークショップ「コミュニケーションを深めよう」をしました。03年度、次第に運営委員が多くなり、ホールが1番広い部屋ですが3~40人になるともうギッチリ、十分な話し合いが難しくなり、分科会をしたり工夫する新しい動きが出てきました。まちづくり局に新顔としてけやき茶社という、お父さん達が主体になって揃いのエプロンをつけて、第三土曜日の午後二時から、四時まで喫茶店をしています。チーム同士でも、コラボをすることも増えました。活動の質を高める意識が皆の中に根付いてきたように思います。

その頃、市の評価委員会が、各コミセンの活動を評価するということが始まり、けやきは、いろんな人達が集って、大変活発にやっていて良いが、「地域の共通の課題をみつけて、地域の人と一緒に解決に向けるということが課題ではないか」という提言をいただきました。扶桑通りの緑化について、成蹊大学、行政、住民で、協働のまちづくりということを進め始めています。それからけやきのこれからを話し合う場として「けやきの明日を考える会」が発足しました。2000年度運営委員は、36名中男の人が8名で、22パーセントでしたが、2008年65名中24名と36パーセントまで上がっています。学生の運営委員は65名中11名、20代から80代まで、それを擁しているコミセンなわけです。

ご存知のように、武蔵野市のコミュニティの特徴は、自主三原則で自主参加、自主管理・運営、自主企画。途中管理の部分が曖昧になっていましたが、05年指定管理者になり今では、名実ともに、住民が自主管理をしています。

けやきの培ってきた文化ですが、よく話し合う、えらい人をつくらない、人を繋ぐ努力、に加えて、お話してきたように、学びつづける、深く考える、という行為もけやきの文化として日常的に定着しています。私達は何もしらないところから入り、コミュニティとは何か、コミュニティ構想から勉強しました。開館までは幾度も幾度も決断を迫られたわけですから、話し合っただけで研究して、深く考えることなしには、突破できませんでした。それほど、険しい道でした、けれども、得たものも大きかったという風に思います。で、みんなが決めて、話し合っただけで決めた事は何かあっても引かなかった。

地域活動に一生懸命な大勢の大人の姿、そういう存在がまちの中にあり、日常的に働いてるおとなの姿が子供達に見えるのが、何にも代え難く子供たちの心のふるさどになっています。若者の皆さんにもいい影響があるのではないのでしょうか。家庭内でもイキイキしているお母さんの姿は嬉しいものです。また親子二代、あるいはご夫婦で、またお姑さんの次にお嫁さんが関わったり、親子孫という方もいらっしゃいます。多世代の協働ということが出来つつあると思います。イベントのときだけでなく、まちづくり局ができてチームそれぞれが本当に目いっぱい、活動を広げている。11チームある中で、それぞれが、日常的に活動していますから、けやきは何時行っても活動している姿が見えている。花もきれい、ホームページも自慢です。いろいろな事をやることで、地域のいろいろな方



の、多様な参加がある。多様性も特徴。お祭りの参加はいまや1000人以上です。多世代の人が学び合える場であり、若い人のケーキと年寄りの煮物の教えっことか日常的にそういう交流ができて、新しい文化を創っているなあと感じます。まちの中の立ち話も増えました。地域の人同士が、けやきを媒体にして、繋がっていつているという関係も出来てきている。それこそ災害にも犯罪、にも強いまちだという風に言えるのではないのでしょうか。

(2008.6.30 「けやきしゃべり場」*当日の話を整理・加筆しました。)